

タイトル名「対人援助実践をレポートするこの一冊」

第23回：第3章-その8-

「対人援助実践のレポートを企画した取り組みとそれの省察 —学会企画ワークショップという実践報告をふりかえって—」を 終えて

著：二階堂哲
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

2020年、2021年の対人援助学会年次大会において、3つの企画ワークショップで日々の実践をレポート（再起動）すべく、自分たちの実践の核となる“想い”を、作品の紹介を通して紹介してきました。なんとなく過ぎ去っていく日々の実践をする中において、この作業は、再び魂を込めるために大切なものでした。

また、先生方、それぞれに歩まれてきた道は大きく違うものでしたが、熱い想いに感化され、励まされ、明日の実践への活力を得ることができたワークショップでした。

これまで紹介してきた本や映画を表にまとめたものが、以下のもの（次頁）になります。それぞれの作品の紹介は、対人援助学マガジン45号以降のバックナンバーをご覧ください。幸いです。

さて、これらのワークショップを経て、私の中で何が変わったのかをお伝えして、僭越ではありますが、今回の企画の総括とさせていただきます。

「自分の正義をしきりに力説する者すべてに、信頼をおくな！」は、20世紀の思想に大きな影響を与えたニーチェの言葉です。現代に生きる私たちは、個々人が自分固有の感覚や考えをもっていることを認めあっています。「みんなちがって、みんないい」という社会の中で、「私は、本当はこれが正しいと思うのだけれど…」と言うことはできても、「まあ人それぞれだから」と、なんとなく妥協してしまい、自分の理想を伝えることがしにくい世の中であるとも思います。絶対的な真理のない、誰もが意見を主張できる中で、それぞれの理想を押し付け合わずに協力していくことの難しさを、現場の実践では感じています。

そのような悩みの中で、このワークショップの話をいただきました。直接的に伝えることが難しいよう

な事柄でも、作品を通じて自分の想いを人に伝えることができるという体験をすることができました。職場においても、冗談やメタファーなど、何かしらの媒介を使いながら、バックグラウンドの異なった相手に自分の想いを伝えることが、以前より上手にできるようになったような気がします。

このような機会を与えてくださいました渡辺先生、小幡先生、長谷川先生、神山先生に感謝を申し上げます。

表 3つの企画ワークショップで紹介された文献および映画

プレゼンター	この1冊(2020)	さらなる一冊(2021)	この1本(2021)
小幡	行動分析家の倫理～責任ある実践へのガイドライン～(2015) 発達障害に関する10の倫理的課題(1998) 支援者が成長するための50の原則～あなたの心と力を築く物語～(2006)	療育とはなにか(1990) 自閉症の世界～多様性に満ちた内面の真実～(2017)	ペイフォワード～可能性の王国～(2000)
渡辺	真理の探究～仏教と宇宙物理学の対話～(2016) 科学するブッタ(2013) When 完全なタイミングを科学する(2018) 医療現場の行動経済学(2018) 心を整える(2014)	目に見える世界は幻想か？ 物理学の思考法(2017) できる研究者の論文生産術(2015)	グリーンブック(2018) キンキーブーツ(2005) 素晴らしきかな人生(2016)
長谷川		人生行動科学としての思春期学(2020) ダリとの再会(1982)	クレヨンしんちゃん嵐を呼ぶモーレツ！ 大人帝国の逆襲(2001) 誰も知らない(2004)
神山		真のダイバーシティを目指して(2017) GIANT KILLING(2007～)	レナードの朝(1991)
二階堂	はじめての応用行動分析(2004) 自由への旅「マインドフルネス」実践講義(2016)	言語と行動の心理学 行動分析学を学ぶ(2020)	生きる(1952) プリズン・サークル(2020)

—つづく—